

企業から見た SEC journal、SEC journal論文

三菱電機株式会社 設計システム技術センター ソフトウェア技術推進部 久野 倫義

SEC journal、SEC journal論文には、開発現場の問題点を解決した事例や現場ですぐに利用できる情報が掲載されており、企業における利用価値が高い。また情報源としての価値に加え、情報発信者としての達成感や高揚感を得られる貴重な場であり、多くの方々に論文を投稿することをお勧めしたい。

1 はじめに

開発現場では様々な問題が発生し、それを解決しながら開発を行っている。解決策も様々あり、先端的な取り組みのみではなく、過去の改善事例を参考にしたものも多い。そのような開発現場における活動をjournal論文として発表しようとする場合、発表に対しハードルが高いという意識が働く。進歩性と有用性の両面を持つ活動でなければ発表できないのではないかと、現場の改善活動には進歩性は少ないのではないかと、思ってしまうことがある。

上記現状から、企業の開発現場で実践した活動をjournal論文として発表を促進するには、意識的なハードルを下げるのが重要である。この意識的なハードルを下げる活動がなければ、開発現場で実践された様々な活動を広く世の中に広めることは困難であると言える。

2 企業から見た SEC journal、SEC journal論文

2.1 情報源としての有効性

SEC journal、SEC journal論文には、開発現場の問題点を解決した事例、現場ですぐに利用できる情報、IoTや情報セキュリティなどの最新情報が掲載されており、企業における利用価値が高い。更に、開発現場で実践された活動がjournal論文として認められていることを知ることで、開発現場にいる読者が発表してみようという意識的なハードルを下げることに貢献していると言える。

2.2 情報発信先としての有効性

企業で実践した活動に汎用的な価値があるのかを、企業内で評価することは困難である。査読付き論文として評価されるSEC journal論文は、企業が実践した活動の価値を客観的に判断いただけるため、腕試しとして貴重な場となっていると考える。企業で働きながら、自分の実践した活動を広く世の中に広めたいという情報発信のモチベーションに対し、企業や学会で広く購読されているSEC journalは、それを実現する手段を提供していると言える。

3 今後への期待

3.1 論文賞受賞時に感じたこと

私は、これまでSEC journal やIPA/SEC出版の本を購読し、他部門の活動を参考に改善活動を行ってきた。そして、SEC journal論文を投稿することにより、情報源として利用してきた立場から、広く世の中に情報を発信し、開発現場の問題解決に貢献するという立場となり、高い達成感を得ることができた。更に、多くの論文の中から、自分たちが行ってきた活動が高く評価され、論文賞をいただいた際には、あらためて高揚感を感じた。SEC journalは、情報源としての価値に加え、情報発信者としての達成感や高揚感を得られる貴重な場であり、多くの方々に論文を投稿することをお勧めしたい。

3.2 論文賞受賞時の企業の反応

論文賞受賞時には、事業所内報に受賞したことが掲載され、事業所内であらためて活動を周知することを行った。また社内の読者から祝福のメールがあり、SEC journalが社内でも広く読まれていることを再認識できた。更に、社内の講座において、受賞時のSEC journal論文を教室に置き、受講者へ周知する活動を行うことで、より広く社内へ情報展開することに活用できた。このような活動により、論文を書いてみようという社員が増え、自己の仕事を論文としてまとめるという技術力の向上と、新しい視点による仕事への取り組みに貢献できると考えている。

3.3 今後への期待

SEC journal、SEC journal論文は、これまで企業における問題点や改善事例を取り上げ、産業界への貢献、学会における研究テーマへのインプットとしての二つの重要な役割を担ってきたと考える。企業における問題は、AIの進展やIoTなどの外部環境の変化により、従来とは異なった形で現れ、これまでの解決策では対応できないケースが増加してきている。このような、変化する問題を解決するために、企業における努力と、学会における新たな取り組みを融合させた対応がますます重要となってくる。ぜひこのような視点で、今後この貴重な場を維持していただければ幸いである。私も論文という形で貢献できるように努力していきたいと考えている。